

# 情報発信の基本は、唯一無二の内容を、 プレゼンの型に則り、障壁なく公開

○轟 真市

物質・材料研究機構 機能性材料研究拠点 〒305-0044 つくば市並木 1-1

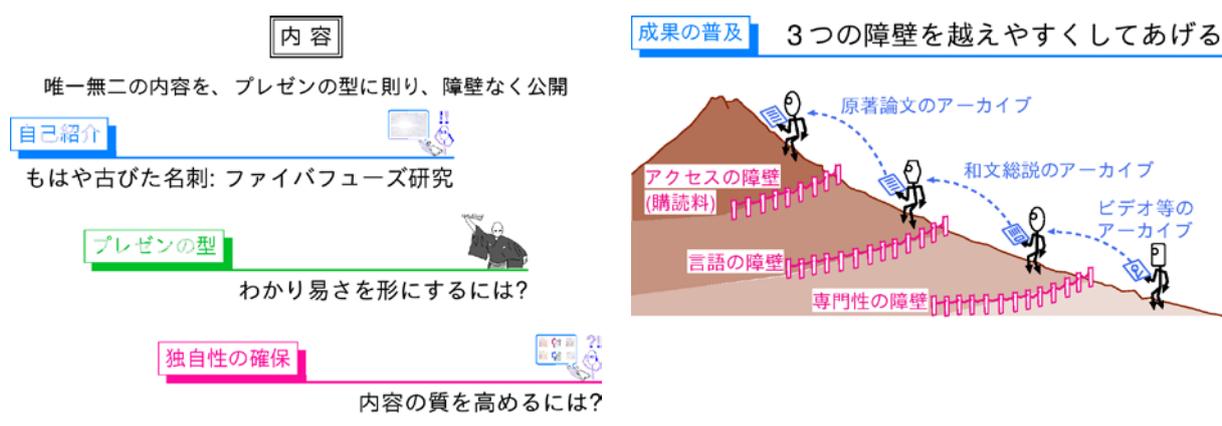
\*Tel: 029-860-4672、Fax: 029-854-9060、E-mail: TODOROKI.Shin-ichi@nims.go.jp

## 1. はじめに

この講演を聞いてくださる方々が「情報発信」と聞いて思い浮かべるのは、おそらく口頭発表や論文執筆のことだろうと思います。私がお届けしたい内容は、それにとどまらず、日々のレポート作成、就職時のエントリーシートや面接にも通じる基本的なプレゼンテーション技術です。プレゼン技術を説く人や本は他にもたくさん見つかることができますが、私の独自性を申し上げるなら、大学4年で研究室に配属されて以来33年間、研究の現場に居て一貫して積み上げてきたものである点です。

## 2. 自己紹介

下の左の図は、今回の私の講演で最初に掲げる「目次」に相当する上映資料です。最初に自己紹介として、最近までやっていた研究のことをお話します。見た目が派手な現象を追いかけていたので、いまでも所属組織の公開イベントなどでデモンストレーションしています。できるだけ多くの人々に知ってほしいと思い、Open Accessの学術雑誌に論文を載せたり、まだ黎明期だったYouTubeで動画を発信したりしました。得難い機会が向こうからやってくるようなことをいくつも経験しました[1]。他人に自分の存在を知ってもらえば、チャンスはやって来ません。研究の世界では、下の右の図に示すような障壁を人々が超えやすくなるように情報発信する必要があると思います[2]。



## 3. プレゼンの型

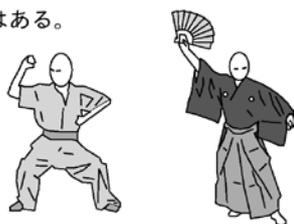
次に、上述の内容をこの講演で私が発表した際に用いたテクニックを解説します。一言で言うなら「プレゼンの型」です(次ページの左の図参照)。口頭発表や論文執筆を問わずすべてに共通する3原則を解説し、その上で私が「論理構造の視覚化」と呼んでいる上映資料の構成方法を説明します。この予稿に示している図はすべてこれに則っています。また第一印象が非常に重要であることを指摘し、ライブ講演を視聴してくださる方限定で具体例を説明します。

プレゼンの型

「型」を身につけよ

- どんな分野にも「型」はある。

- 「型」に則る  
⇒ その意味を理解する  
= 最短距離を進む



- ⇒ 誤魔化しが効かない作業を課す

- 「型」を踏まえた上に、個性を築け

- プレゼンの目的は「相手を動かす」こと

得意技を磨く

学生時代(1987-)からのたしなみ

- **LaTeX** で執筆、上映資料も

⇒ 「論理構造の視覚化」を自動生成

⇒ **プレゼンテーション技術**を人に講義

- 装置制御、データ処理は**自分でプログラムを書く**

- 使うのは**フリーソフトウェア**

⇒ 装置も部品を買って組み立てる

⇒ **手早く安価に独自の研究環境を構築**

4. 独自性の確保

最後に、情報発信する内容を唯一無二の内容に高めていくために私が取り組んでいることを紹介します。研究発表の場合には、その内容自体が唯一無二であることは言うまでも無いですが、それを人々に届ける方法がわかりやすく工夫されているという点も、「唯一無二」に含まれます。とは言え、多忙な日々の中、手を掛けていられる時間は限られます。

私の場合は、学生時代からプログラミングが好きだったこと活かし、パソコンで自動化できることは極力増やして、余った時間を内容を高めることに割り当てました。上映資料に「論理構造の視覚化」を盛り込むのを自動化したり[3]、実験装置を部品から組み立て制御ソフトも自分で書いて、低コストで「唯一無二」に仕上げることに役立っています(上の右の図参照)。皆さんにも、それぞれ得意なことがあるはずで、それを活かして取り組む方法を編み出せば、楽しく仕事をこなすことができるでしょう。

ここでひとつ指摘しておきます。人と同じことをやっても、人並み程度で終わってしまうのが関の山です。後々役に立つかどうかはわからないけれど、私はこれが面白いからのめり込むのだ、というものを見つけてください。右上に示したものは、取り組み始めた当時は、まさにそんな状態でした[4]。そんなもの、まだ見つけられていない、という方は、得意なものを組み合わせるとか、不得意なことを得意なもので補うことも考えてみてください[5]。講演の中でヒントをお示しできると思います。

文献

[1] 轟 眞市：「偶然を呼び寄せてセレンディピティを発揮するには」, 応用物理, **78**, 7, pp. 668-671 (2009).

[http://dx.doi.org/10.11470/oubutsu.78.7\\_668](http://dx.doi.org/10.11470/oubutsu.78.7_668)

[2] 轟 眞市：「研究者のアウトリーチ活動としてのセルフアーカイビング」, 情報管理, **55**, 2, pp. 79-86 (2012).

<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.79>

[3] 轟 眞市：「定番プレゼンソフトを越えて：聴衆に配慮したスライドを LaTeX とスクリプト言語で作成した例の報告」 (2009). The Asian Journal of TeX, **3** [2] pp.109-118 (2009) の和訳. [http://ajt.ktug.kr/2009/0302todoroki\\_j.pdf](http://ajt.ktug.kr/2009/0302todoroki_j.pdf)

[4] 轟 眞市：「技術者の道具箱(2) Linux との巡り合わせは葉隠の如し」, マテリアルインテグレーション, **21**, 8, pp. 65-66 (2008). <https://doi.org/10.46297/nims.1393>

[5] 轟 眞市：「英文執筆に役立つ電子辞書類検索環境」, マテリアルインテグレーション, **22**, 6, pp. 61-62 (2009). <https://hdl.handle.net/20.500.11932/68359>

**結論** 唯一無二の内容を、プレゼンの型に則り、障壁なく公開

**自己紹介**

アクセス障壁なき公開で発見され易くなり、機会を呼ぶ

**プレゼンの型**

適切な型に則っていれば、内容が相手に届き機会を呼ぶ

**独自性の確保**

自分が面白がっていなければ伝わらない!!